



矢吹徹

私は大学生時代、勉強もそっちのけで聖書研究会のメンバーとして学内伝道に励んでいました。住んでいたのは千葉の幕張でしたが、電車で2時間かかる東京・世田谷にある教会まで、週に2回通って教会生活をしていました。まさに模範的なクリスチャン大学生だったと思います。

しかし、大好きだった叔父の事故死をきっかけに、パタッと教会へも聖書研究会にも行かなくなりました。クリスチャンではなかった叔父が天国に入れないのではないかと思った私は、「そんな天国は、そんな神様は私にはいない」と、私なりの反発を理由にしていました。当時、11才年の離れた兄は埼玉で牧師をしていましたが、私を心配して何度か幕張の下宿まで足を運んでくれました。私の話をよく聞いてくれ、いろいろな助言や励ましもくれましたが、私の心は動きませんでした。そんな私に兄は一通の手紙を送ってきました。そこには、「君はいろいろな事を理由に挙げているが、結局は言い訳にしか過ぎない」と書かれ、「夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。」(ローマ13:12~14) というみことばが添えられていました。酒を飲んだことも、好色におぼれたこともありませんでしたが、そのみことばが心から離れませんでした。本当は周りから立派だと言われ、期待されるクリスチャン生活に疲れてしまい、普通の大学生のように自由に遊び回りたいと思っていた私の心を見透かされているようで恐くなり、そのみことばを読まないように、思い出さないようにとしましたが、結局、頭から追い払うことが出来ず、うなだれ、悔い改めるように信仰生活へと引き戻されました。心優しい兄や聖書研究会の仲間の言葉も有難かったですが、私をもう一度イエス様の元へと引き戻したのは聖書のみことばでした。

献身し、神学校生活を送っていた時、将来を共に歩んでいきたいと願う女性に出会いました。積極的にアプローチし、好意を持ってもらいたいと願い、映画に誘ったり、食事に誘ったりしました。しかし彼女からもらった答えは、主からの確信を得たいと、詩篇25:12の「主を恐れる人は、だれか。主はその人に選ぶべき道を教えらる。」のみことばが添えられた手紙でした。その日から、「きっと神様が選ぶべき道を教えて下さる」と信じ、二人で会うことを控え、神学校での学びに専念し、主を

恐れ、主を第一に歩むことを心掛けるようにしました。その女性は今の私の妻ですが、私たちが結婚へ導いたこのみことばを忘れないように、結婚指輪の裏側には詩篇25:12と刻んであります。

私の今までの人生において、家族や友人、その時々を経験などが大きな支えとなってきたことは間違いありません。それはきっと、神様が送って下さった人たちであり、神様が与えて下さった経験でしょう。本当に感謝なことです。しかし、40年のクリスチャン人生を振り返り確信していることは、今もクリスチャンとして歩んでいられる土台となっているのは、聖書のみことばだということです。「みことばの光」の表紙に絶えず記されている「**あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。**」(詩篇119:105)の通り、最も大切な時に、私の人生の行くべき道を照らしてくれたのはみことばでした。

教会のニーズや在り様は、時代とともに変化したりします。時には社会に受け入れられようとして、この世の宗教や団体と同じものに手を染め、この世に迎合してしまう危険性をはらんだりします。時として神様の満足ではなく、集った人々に満足を与えるための礼拝が形造られたりもします。数百人の大教会を目指す教会成長がもてはやされた時もありましたが、今は十数人の教会をたくさん作る教会増殖が叫ばれています。フルタイムの献身者を募る集会が頻繁に行われていた時もありましたが、今は信徒伝道者の育成が重要だと叫ばれています。そのような揺れ動く時代の流れの中で、聖書同盟も、どのようにして教会に受け入れられ、教会の役に立てるか悩み、試行錯誤しながら60年の年月を歩んできたかもしれません。そして今も、「これからの聖書同盟はどうあるべきか？」と苦悩しているかもしれません。

「ジュニアみことばの光」や「みことばの光」の発行部数の増減は、ある意味、聖書同盟と教会の関わりが増減を映し出すものでしょうから、そのことに一喜一憂するのも分かります。しかし「**この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。**」(マルコ13:31)とのみことばの通り、決して滅びることのない、変わることはないみことばとともにある信仰生活の大切さを伝え続ける聖書同盟の働きが、今までそうであったように、これからもその中心をぶらすことなく続けられていくようにと願っています。

ここ数年、数十年の動向を恐れず、愚直なまでに聖書を読む大切さを伝える聖書同盟は、必ずや神様の御手の中で用いられ続けて行くことでしょう。中学生の時に「ジュニアみことばの光」を手にしてから40年間、私を神様への信仰から離れないようにと助けてくれたのは、聖書のみことばだったのですから。

(保守バプテスト同盟・宇都宮聖書バプテスト教会牧師)



ぼくは三好陽之と言います。保守バプテスト津田沼教会から来ています。ぼくは高2から毎年CSKアウトキャンプに参加し、そして今年行われたISC7th（第7回青少年国際キャンプ）に行ってきました。

ぼくが、CSKとの関わりのなかで、得たものを1つ挙げるとするならば「神様との出会い」です。中高で運動部に入ったぼくは、教会と部活のどちらにいくのかうやむやになっていました。高2のとき、教会の先輩のせいで、半強制にアウトキャンプにつれてかれたぼくは、思いがけない楽しさと出会いました。自然の中で信仰の友と過ごすこと、ずっと神様を考える空間の中で、神様がそばにいることを実感しました。その冬、洗礼を受けました。ISC7thでは、海外の友とともにひたすら賛美して楽しみました！夜寝る前に、ルームメイトとそれぞれの国の言語で祈りあったことが幸せでした！神様と出会う、ぼくと神様との関係を見つめる、そのきっかけがCSKで与えられました。

最後に、ISC7thで与えられた御言葉、今年に入って何度も何度も繰り返され語られる御言葉をシェアしたいと思います。

「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」（箴言 3:5-6）



こんにちは。私は広瀬志保と申します。2014年から2年間、仙台福音自由教会の伝道師として奉仕していましたが、今日はその仙台で3人の中学生としていたジュニみこの会のことを、みなさんにお分かちしたいと思います。

同じ教会で育った中学生3人、Aちゃん、Bちゃん、Cちゃん。Aちゃんは洗礼を受けたいと思っていましたが、他の2人は、大人になったらいつか、という感じでした。この3人が集まり、3人で賛美し、3人で聖書とジュニみこを開き、3人で考え、3人で語り、3人で祈る土曜日。神さまは、この土曜日を通して、たくさんの奇跡を見せてくださいました。

① 神さまが語られる：神さまとの楽しい交わり

第一に、神さまが、みことばを通して語ってくださったということです。それで、私たちには神さまがぐっと近くに感じられるようになりました。クリスチャンホームで育った3人ですが、それでも改めて聖書を開くと、「えー、神さまこんなこと言っていたの！」「神さま、こわっ！」「イエスさますごい！」と驚きの連続。みことばを聞くたびに、爆笑したり、絶叫したりして、神さまとの生きた交わりを経験するようになり、それは本当に楽しい時でした。そして誰より神さまが、喜んでおられたと思います。

② 受洗への導き：洗礼のための学びじゃないと言ったのに

第二に、神さまは、もともと洗礼を受けたいと思っていたAちゃんだけでなく、なんと、3人ともを洗礼に導いてくださってしまいました！ Aちゃんの誘いに対して、BちゃんとCちゃんが「洗礼のための学びだったら、それはしたくない！」と言っていたので、「それじゃあただ一緒に聖書を開く会にしよう」と言って始まったジュニみこの会。しかしみことばを開くと、神さまが一人ひとりの心に呼び掛けてくださるということが分かりました。神さまからは、逃げられませんね！

私は決して3人に、誰がいつ洗礼を受けるかということは話しませんでした。また、中学生3人の間でも、そういう打ち合わせはしなかったのです。

そんな中、最初に洗礼を決心したのは、意外にもBちゃんでした。ジュニみこでピリピ書を開いたことがきっかけでした。「私は、私を強くしてくださる方によって

どんなことでもできる」(ピリピ 4:13)。学校での友人関係に悩む中にも、神さまが自分と一緒にいてくださり、イエスさまが誰よりの味方になってくださることが分かったと言います。

もともと洗礼受けたい気持ちでいた A ちゃんは、逆でした。みことばを学ばば学ぶほど、ただの憧れだけで洗礼を受けてはいけないという気持ちに変わったと言います。神さまが、ご自身が神であって、恐れられるべき偉大な方であることを、A ちゃんに教えておられたのです。しかし、信仰によって、恵みによって救われるという無条件の愛が分かったとき、A ちゃんは恐怖心からではなく、感謝の心をもって応答するようになりました。

C ちゃんは、ジュニみこで、普段は開くことが少ないエレミヤ書を読んだとき、自分の罪にショックを受けてしまいました。しかし、その聖句はこう続いていました。

「誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。」(エレミヤ書 9:24) このデボーションがきっかけで、「イエスさま、ごめんね、イエスさまありがとう」と、心からの悔い改めの祈りに導かれ、洗礼を決意したのです。

神さまは実に、ジュニみこのデボーションを通して、一人ひとりに、それぞれにぴったりのみことばを与えてくださいました。そして、友だちがどうするか、他の人がなんと言っているかではなく、神さまの導きだけに素直になって、洗礼を決意することができたのです。

③ 神さまとの関係だけじゃない！ 深まった友だち関係

第三に、神さまは、神さまとの関係だけでなく、3人の友人関係も深めてくださったということです。洗礼は、ゴールではありません。神さまは、洗礼を受けたクリスチャンとしての3人に、さらにたくさん恵みを注いでくださいました。

ある日のジュニみこの会は、とても印象的でした。3人がいつものように、それぞれの学校で経験した出来事を分かち合っていたときです。一人がとても落ち込んでいると、もう一人が、「学校の子になんて言われようと大丈夫だよ。教会に来ればうちらはいつも友だちだし、うちらが一緒にいられないときは、イエスさまと一緒にいてくれるからさ」と、慰めました。3人の普通の会話の中に、本当に自然に生まれた愛の言葉でした。それで、みんなでそのことを祈りました。

神さまはジュニみこの会を通して、私たちも気付かない間に、神さまを中心にした関係を育てててくださいました。一緒にゲームをしたり、遊んだりすることもいいと思います。でも、楽しいだけの友だちなら、教会でなくてもいるかもしれません。しかし、みことばによってつながった信仰の友は、そうではありません。これから続く人生、どんなことがあったとしても、ともに喜びともに泣くことのできる存在、それが信仰の友です。そして、信仰の友の存在を通して、これからも神さまがこの3人を豊かに励まし導いてくださると思います。